子どもの自学力を育てる国語の授業

NO. 10

——教材解釈と授業展望計画——

〈5　年〉

大造じいさんとがん

上野　芳樹

1　単元の目標とその解説

「大造じいさんとがん」は、古くから教科書教材として取り上げられてきた。現在も、光村・教出・学図・東書の四社に採択されている。それは、この作品の文学教材としての豊かな価値が数多くの実践を通して確かめられているからであろう。

この作品の教材として優れている点はどんなところにあるのだろうか。

第一に、読み物として理屈抜きに面白い。老練な猟師大造じいさんが、経験と智恵の限りを尽くしてがんの頭領残雪に闘いを挑む。しかし、その都度、残雪はじいさんを上回る智恵でかわしていく。そして、最後には我身を捨てて仲間を救うという予想外の残雪の行為によって、大造じいさんを完全に圧倒してしまう。こうしたダイナミックな筋立てが、一読して子どもたちの心を捕えてしまうからである。

しかも、この作品の叙述が正確な動物の生態に基づいているが故に、単なるフィクションの世界を超えた迫真性をもって読み手に迫ってくる。そういうところも、この作品を面白くしている一因だろう。

第二に、主題が明快であり、その追求の筋道もはっきり見えるということがある。

この作品の主題を一言で言えば、動物の本能的な生態の中に人間としての真実を見る、ということになろうか。物語は、残雪と大造じいさんの二本柱で展開しているが、軸となるのは大造じいさんである。残雪も一方の柱であるが、あくまでじいさんの視点から描れている存在である。

大造じいさんの残雪を見る目は、一章ごとに明確に変容していく。――〈いまいましく思っていた〉→〈たかが鳥〉→〈「うーむ」と思わず感嘆の声〉→〈「「うううん」とうなってしまった〉→〈ただの鳥に対しているような気がしなかった〉――という具合に。

読み取りの視点を大造じいさんに定めて、その心情の変化を読み取っていく。そして「たかが鳥」から「ただの鳥に対しているような気がしなかった」へと、じいさんの残雪を見る目を変えさせたものは何かということを追求していけば、おのずと主題に迫っていくことができるだろう。

高学年では、主題追求が読解の大きな目標になってくるが、そうした主題追求の方法の一典型をこの教材によって学べるのではないかと思う。

第三に、鳩十独特の美しい文章表現（特に情景描写）がこの作品にもよく表れている。

鳩十は、情景描写の中に登場人物の心理を巧みに反映させている。例えば、「秋の日が美しかった。」「東の空が真っ赤に燃えて朝が来た。」などは、その時の大造じいさんの心理が情景の中に投影されている好例である。

こういう叙述にも触れていくことで、子どもたちの文学の世界を見る目を広げていくことができよう。ただ、その表現はやや誇大に過ぎるきらいがあることも否めない。指導にあたっては、その点に留意する必要があろう。

第四に、読書教材としても有効に生かせるということがある。この

作品を契機として、他の鳩十の一連の動物物語、更に一般の動物文学へと発展させ、子どもたちの読書意欲を高めていくことも可能である。一連の鳩十作品を読んで、この作者の思想を考えてみるのも面白いだろう。学図などは、この作品を読書教材として位置づけている。

このように「大造じいさんとがん」は、教材としての豊かな価値を蔵しており、その生かし方も多様に考えられる。本稿では、読解力をつけるための教材としての位置づけを第一義とし、そこに重点をおいた指導プランを考えていくことにする。従って、単元目標は次のように設定したい。

〈単元目標〉

○登場人物の気持ちや場面の情景を味わいながら、主題についての自分の考えをまとめることができるようにする。

2　教材の研究

ア　テキストの選択

この作品は、教科書によってかなりの異同がある。教材の分析を始めるにあたり、まずその点から検討してみたい。

光村版は、本文の前に「まえがき」があり、この作品を語りの調子に整えている。文体は敬体である。学図・東書版は、「まえがき」はなく、文体は敬体である。教出版も本文だけで、文体は常体になっている。

関口安義氏の調査によると、「少年倶楽部」に初めてこの作品が発表された時（昭・一六）は、「まえがき」はなく文体も常体であった。（教出版はこれを採用）その後、初刊本（三光社）に収められた時、「まえがき」が添えられ、文体も常体から敬体に変わったということである。（光村版は初刊本による）

現在、三種のテキストがあるわけだが、教材としてはどれが最良であろうか。

私としては、教出版を選びたいと思う。その理由のひとつは、常体の方が叙述にゆるみがなく、情景や心情が身近に迫って感じられるからである。はやぶさと残雪の闘いの場面など、常体による描写の方が、はるかに緊張感をもっているように思うのである。

また、「まえがき」をつけると、この物語は大造じいさんの三十代のできごととなってしまう。だが、主人公大造は〝じいさん〟だからよいのではないだろうか。猟師としての様々な経験を積み、人生の機微も知り尽くしたじいさんだからこそ、残雪の行為にもまた素直に心うたれるのではないか。関口氏によれば、このスタイルの変更は、初刊本に入れる際、一冊の本を「一つの筋のあるものとしてまとめたい」という編集上の意図からなされたものだという。つまり他の作品と形式をそろえるための改作であり、内容を高めるという意図から出たものではないのだ。こうした理由から私は教出版のテキストを最良と考える。以下の教材分析も教出版によって行うことにする。

イ　私の読み

〈一章〉

大造じいさんの残雪に対する思いは「いまいましい」から出発する。熟練の猟師である大造じいさんが、たかが一羽のがんのために「一羽

のがんも手に入れることができない。」という状況がもう何年も続いている。「いまいましい」には、たかが一羽の鳥ごときに猟師としての誇りを傷つけられ続けている悔しさがこめられている。

今年もがんがやってくる季節となった。残雪を待ち構えていたじいさんは、「今年こそは」とかねて考えておいた特別な方法に取りかかる。生計上の理由より猟師としてのプライドがそうさせるのだ。寒い冬の夜、一晩中水に浸かってうなぎ釣り針を仕掛けるじいさんの姿は外目からは滑稽ですらある。だがそこに一徹な猟師大造じいさんの執念を見ることができる。「今度はなんだかうまくいきそうな気がしてならなかった。」と思うのも、単に奇策を用いたから、ということだけではなく、己れの力限りやったという満足感からくるものでもある。

計略は見事に当たり、一羽のがんを捕えるのに成功する。たった一羽のがんを「ほほう、これはすばらしい。」と子どものように大喜びする。そこには、数年ぶりにやっと獲物を手にした喜び、それにもまして自分の全智をかけて仕掛けた策が見事に当たったという、己れの技量への満足感がある。それが、残雪を「たかが鳥」と見下してしまうことになる。

だが、次の日残雪は、じいさんの予想もしなかった方法で計略を見破ってしまう。「うーむ」と思わず感嘆の声を漏らしてしまうじいさん。今まで自分が考えていた範疇をはるかに超える残雪の力量を目の当たりにして、じいさんは残雪をもはや獲物としてではなく自らの好敵手として位置づける。

〈二章〉

昨年の失敗をふまえ、じいさんは夏のうちから打倒残雪の計画を進める。五俵ものたにしを集め管理しておく苦労を思うとき、その意気込み、執念は昨年の比ではないことが読み取れる。

夏のうちから準備した計略は、すべてじいさんの思惑どおりに進んでいく。残雪が見通しの効く場所を餌場に選ぶこと、そこでは残雪の警戒心も薄れることを計算しての今回の計略は、「沼地のうちでもそこが一番気に入りの場所」となって見事に結実する。「会心の笑み」には、自分の苦労して準備した計略が完璧なまでに整って一分の隙もない状況になったことに対する深い満足感がある。

翌朝、満を持して待ち構えるじいさんのもとへ残雪の群れは何の疑いも持たず、ぐんぐん近づいてくる。じいさんの心は、ほおがびりびりするほどに高潮する。しかし、次の瞬間残雪はそんなじいさんを嘲笑うかのように急角度に方向を変え、逃げ去ってしまう。「ううん」と唸るじいさんの心の中は、もっていきどころのないくやしさであふれている。その一方で、完璧と自負していたこの計略の一点のすきを一瞬にして見抜いた残雪の計り知れない智力を恐れに近い思いで受け止めるのだった。

〈三章〉

三年目のじいさんにはこれまでのような「今年こそは」といったむき出しの闘志は感じられない。「今年はひとつこれを使ってみるかな。」とあくまで慎重である。もはや残雪の手強さを身にしみて知っているじいさんは、おとりのがんがすっかり自分の意のままに動くというだけでは不安なのだ。

だが、沼地を偵察してみると、残雪たちは去年小屋がけした所から弾の届く距離の三倍も離れている地点を餌場にしていた。しかもそこ

はがんの餌が十分にあるらしい。これは今回の計略にとって理想的な状況であった。おそらく何度も偵察を繰り返し、今度こそ残雪のつけ入る隙は一点もないことを確認してじいさんは、初めて「うまくいくぞ。」と静かに微笑む。そこには、むき出しの闘志以上の深い、強固な意志を見てとることができる。

闘いの朝が来た。そしていよいよおとりのがんを飛び立たせようという瞬間、思わぬ事態が発生する。はやぶさの出現である。しかし、じいさんを心底驚かせたのは、その後の残雪の行動であった。逃げ遅れた一羽の仲間を救うために残雪はかなうはずのない相手はやぶさに向かっていく。しかも一方には自分をねらう人間さえいるのに。今まで逃げることによって身を守ってきた残雪が、今、仲間を救うために自らを犠牲にして力の攻撃に入っていく。

残雪の影を認めた瞬間、反射的に銃を向けたじいさんの、その銃を下ろさせたものは、恐ろしいほどの残雪の気迫であった。しかも、かけつけたじいさんに対して残雪は、残りの力をふりしぼり、毅然とした態度で立ち向かう。

こうした一連の残雪の姿を目の当たりにして、じいさんはもはや残雪をただの鳥とは思えなかった。人間である自分をもはるかに凌駕した巨大な存在として見え、畏敬に近い思いで見つめるのだった。

〈四章〉

一冬、じいさんは残雪を介抱してやる。そこには、かつてのおとりのがんのように餌づけしようという思いはない。体力を元通りにして野に帰してやること、それが自分の人格を揺り動かすほどの深い感動を与えてくれた残雪に対する精一杯の償いと考えていたに違いない。

ある晴れた春の朝を待って、じいさんはおりのふたをいっぱいに開けてやる。そのじいさんの姿には、この日の来るのを待っていた喜びがあふれている。

北へ飛び去っていく残雪をはればれとした顔つきで見守るじいさん。そこには残雪との闘いによって人間としての豊かさを一段と深めたじいさんの姿があった。

この物語の主題を私なりにまとめてみると次のようになる。

身を捨てても仲間を助けようとし、最期まで毅然とした態度を取り続ける残雪の姿は、鳥という存在を超えてあるべき人間の理想の姿としてじいさんに迫ってきた。それがじいさんの心を根底から揺るがし、己れの人間としての貧しさを改めて思い知らされる。こうした、一羽の鳥残雪によって変革されていくじいさんの姿、それがこの物語の主題である。より普遍化して言えば、無私の行為が人を動かす、ということになろうか。

ウ　教材としての読み

一章でも触れたように、この物語は子どもたちにとって非常に親しみ易いものであり、特に指導の手を入れなくても、子どもたちの力だけで十分楽しんで読め、またそれなりの感想も待てるものであろう。だが、一般的な読みに終わらせずに鋭く主題に迫っていくような読み取りをさせていくためには追求の角度を明確にもつことが必要である。この物語のどこに視点を当て、どう追求させていけばよいだろうか。

先述したように、この物語は残雪と大造じいさんの二本柱で構成さ

れているが、どちらを軸にして読むかと言えば、やはり大造じいさんである。残雪の行為は、いわば動物の本能から出たものである。その本能的行動をじいさんがどうとらえたかということが描かれているのである。「堂々たる態度のようであった。」「……と努力しているようでもあった。」などの記述を見れば明らかである。

つまり、大造じいさんに追求の視点を当てることが重要であり、残雪自身の思いをさぐっても何も出てきはしない。まず、この点を明らかにしておきたい。

では、大造じいさんに視点を当て、残雪に対する思いの変容ということを追求の軸としながら、その時々のじいさんの心情を深く読み取っていくには文章のどこに着目していけばよいのだろうか。

一番わかり易いのは、大造じいさんの行動を描写した文を手がかりにすることである。一章で言えば、〈今年こそは……とりかかった〉→〈ひとばんじゅうかかって〉→〈むねをわくわくさせながら〉→〈思わず子どものように〉→〈「はてな。」〉→〈「ううむ。」〉というふうに、筋の展開に即しながら、その時々の大造じいさんの行動の中にこもる感情を読んでいけばよいのである。

更に、物語全体の大きな構成の中で大造じいさんの変容を捕えるには、残雪を見る目が変わっていく節目を捕えることが大事である。

○なかなかりこうなやつ
←
○「うーむ」と思わず感たんの声をもらしてしまった
←
○「ううん」とうなってしまった。
←
○ただの鳥に対しているような気がしなかった。
←
○はればれとした顔つきで見守っていた。

こうした章ごとの核となる文をつないで読み取っていけば、始め、たかが鳥としてしか見ていなかった残雪を、ついには自分をも超える存在として見るまでに変容していくじいさんの心のありようが明確にとらえられるであろう。また、おのずと主題に迫っていくこともできよう。

エ　教材をさぐる

ここでは、章ごとに一文ずつ丹念に解釈し、核となる言葉を見つけること、またそれらが文脈の中でどんなつながりをもっているかということを明らかにしてみたい。

〈一章〉

・今年も

今年初めてやってきたのではない。もう何年も前からやってきている。これは、「今年こそは」に対応する。待ち構えていたものが来たという思いがこめられている

・残雪は

「残雪が」ではない。じいさんには既知の存在である。

・残雪というのは一羽のがんにつけられた名前である

どのがんにも名前がついているわけではない。その卓抜した統率力の故に、いつしか猟師仲間から特別な呼び名をつけられるようになっ

たのだ。

・なかなかりこうなやつ

相当な智恵者である。だが、あくまでも鳥としてのことで、「なかなか」や、「やつ」という言い方の中に見下している目を感じる。これが「たかが鳥」につながる。

・決して人間を寄せつけなかった

常に一定の距離を猟師との間に保ち、射程距離に迫ったとたんさっと逃げるということである。獲物を目前にしながら撃つことさえできない。それがじいさんには一層いまいましい。

・残雪がくるようになってから一羽のがんも

じいさんは熟練の猟師である。以前はかなりのがんを捕っていたのだろう。

それが残雪が来るようになってから、たったの一羽も捕れなくなってしまった。だから一層いまいましいのである。

・いまいましく思っていた

たかが一羽の鳥如きに長年鍛えた猟師の技が通じない。猟師としての誇りをいたく傷つけられていることが悔しくてならない。

・今年こそは

じいさんのなみなみならぬ意気込みがある。この決意が「なんだかうまくいきそうな」のもとになっている。

・かねて考えておいた特別な方法

残雪が来るずっと前から、いろんな策を思いめぐらしていた。そして、釣り針を使うという全く新しい方法にいきついたのである。ここにもじいさんの大変な意気込みが感じられる。

・ひとばんじゅうかかって

「今年こそは」と意気込むじいさんの具体的な姿がここに出ている。残雪への執念がそこまでやらせたのだとも読めるが、むしろ実際に作業してみてこの作戦への確信も生まれ思わず夢中になってしまったのだとも読める。暗闇でにたりにたりしているじいさんの顔が浮かぶ。

・わくわく

相当な期待があるから胸がはずむ。不安いっぱいの「どきどき」ではない。ふくらむ期待で不安は心の底に沈んでいる。単純で人の善いじいさんの性格もここに出ている。

・「ほほう、これはすばらしい。」

「これ」は、もちろん数年ぶりでやっと手にした穫物を指してはいるが、自分の計略そのものをも指している。苦心の計略が見事に成功したことへの満足感がある。積年の悔しさが一挙に晴れたことで子どものように無邪気に心を解放させている。

・たかが鳥

自分の計略の成功に酔うあまり、残雪を侮ってしまう。これがあとの「うーむ」で大きく揺り戻される。

・秋の日が美しかった。

昨日の成功と自信が辺りの景色を見る余裕を生む。美しい景色は、そのままじいさんの心象でもある。

・はてな?……いったいどうしたことだろう。

作戦が失敗したという思いよりも予想した状況と全く違っていることに困惑しているという感じである。わけがわからないのだ。

・「うーむ。」　思わず感たんの声をもらしてしまった。

釣り針の糸がみんな引き延ばされてあるのを見てやっと謎が解けた。よもやこんな見破り方があろうとはじいさん自身考えていなかった。あまりの鮮かさに悔しさよりも感嘆の思いが思わず出てしまった。

・これもあの残雪が

なかなかりこうなやつとはいえ、「たかが鳥」と思っていた残雪が新たな姿で迫ってくる。

［一章の構造］

〈残雪〉

なかなかりこうなやつ

たかが鳥

〈大造じいさん〉

いまいましく思っていた

・りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけない

・残雪が来るようになってから一羽のがんも

今年こそは

・かねて考えておいた特別な方法

・ひとばんじゅうかかって

わくわく

「ほほう、これはすばらしい」

思わず子どものように声をあげて

どうしてなかなかたいしたちえ

・秋の日が美しかった

・「はてな」

・いったい

「ううむ」

思わず感たんの声をもたらしてしまった。

〈二章〉

・そのよく年も

残雪のしたたかさを十分思い知らされたその翌年。昨年以上の闘志をもってじいさんは待ち構えていた。

・例によって　見通しのきく所をえ場に選んで

抜け目のない残雪らしく見通しの効く安全地帯を選んでいる。しかしそれを見越した上での作戦なのだ。じいさんの予想通りである。

・夏のうちから心がけて、たにしを五俵ばかり

まだがんの来る季節ではない夏のうちから用意を始める。五俵ものたにしを集め、保存しておく苦労は並たいていのことではない。そこにじいさんの昨年にも勝る意地と執念がある。

・がんの好みそうな場所

つまり、残雪の好みそうな場所である。見通しが効き、警戒心をもたない場所は、逆にじいさんには狙い易い、最も都合の良い場所になる。

・案の定→その翌日もうんとこさとまいた

じいさんの予想通り。しかもさかんに食べた形跡がある。ますますじいさんの心にはずみがついていく。

・会心のえみをもらす

夏のうちから残雪の動きを予測し、周到に準備してきた計略が、今予想以上の完璧さで完了した。その満足感が自然と笑みとなってこぼれる。

・あかつきの光が　すがすがしく

この計略の成功を確信して待つじいさんの心象を映している。

・ぐんぐん↑↓ほおがぴりぴりするほどひきしまった。

がんたちは何の迷いもなくまっすぐにじいさんのもとへやってくる。ついに積年の恨みを晴らす時が来たのだ。引き金を引く、その最後の一瞬の緊張に必死で耐えている。

・「ううん」とうなってしまった。

もはや確実と見えた勝利の最後の瞬間、またしても残雪に逃げられてしまう。ぎりぎりに張りつめていた心の緊張がすかされて、心のもっていきようがない。言葉にできないほどの無念さが呻き声となる。同時にそれは残雪の計り知れない智力に対する驚嘆の声でもある。認識を新たにしたはずの残雪が、今また一層巨大な存在として見えてくる。

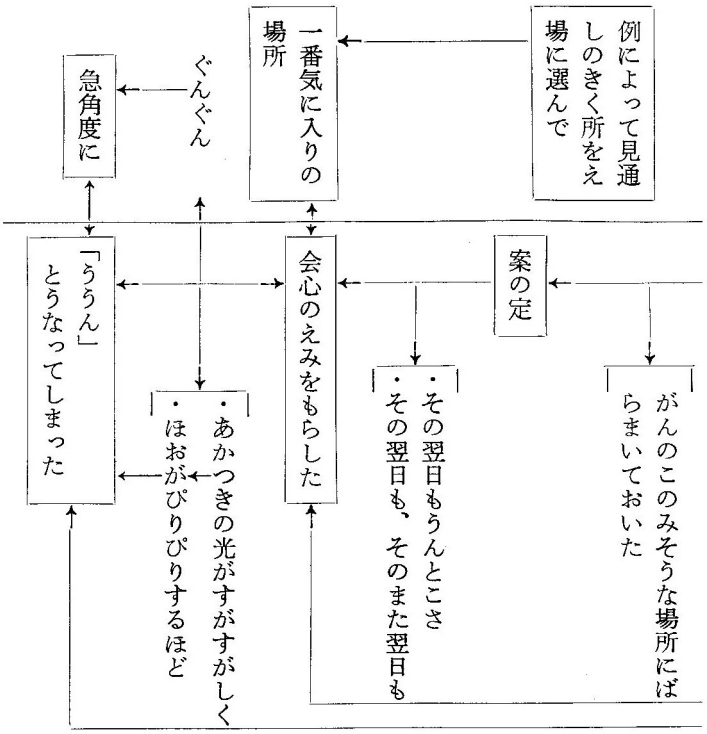
［二章の構速］

〈残雪〉

そのよく年も

〈大造じいさん〉

・夏のうちから心がけて
・五俵ばかりのたにし



〈三章〉

・じっと見つめながら

おとりのがんとしての適性を厳しい目で点検している。どんな状況でも確実に戻ってくるほどに自分になっていているかどうか。

・今年は、ひとつ、これを使ってみるかな。

羽をばたつかせてじいさんに飛びついてくる。どこにいても口笛を吹けば帰ってきて肩先に止まるほどに慣れている。おとりのがんとし

ての役目は確実に果たすに違いない。だが、まだこの作戦を実行するのにためらいがある。それは残雪の計り知れぬほどの智力に対する恐れがあるからである。おとりのがんが命令通りに動くというだけではまだ不安なのだ。

・うまくいくぞ

勝利を確信できなかったじいさんが、沼地のようすを見た時、初めて「勝てる」と判断した。それは何故か。一つは、小屋から三倍も離れている地点をえ場にしていること。つまり、小屋からねらった場合も決して残雪は警戒しないほどに離れていて、なおかつ口笛が十分届く距離であったということである。理想的な位置にがんがいる。しかも、そこは十分にえがあり、当分そこへやって来ることは確実であった。おとりのがん、現場の状況を冷静に厳しく点検して、何ひとつ手ぬかりのないことを確認したじいさんは初めてにっこりほほえむ。もはやかつてのような単純なじいさんではなくなっている。

・真っ赤に燃えて朝が来た

満身に闘志をこめて決戦に臨むじいさんの心象を映している。

・わくわくしてきた

グワー・グワーというがんの鳴き声を身近に聞くと自然に期待で胸が高鳴ってくる。

・しばらくは目をつぶって、口びるを静かに、

はやる心をおさえ、万全を期して口笛を吹く用意をする。昨年に比べて平静な姿のじいさんになっている。

・どうしたことだ

小屋の中にいるじいさんには全体の状況が見えない。わけがわからない。

・「あっ」→ピュ　ピュ　ピュ

おとりのがんとはいえ、長年飼って情が移っている。「助けたい」という思いが瞬時にこみあげてきた。

・さっと大きなかげ——残雪をねらった

この時には、まだ残雪が何をしようとしているのかじいさんにはわからない。ただ目前に残雪がいる、ということで反射的に体が動いて銃を向けた。

・が、何と思ったか再びじゅうをおろしてしまった。

じいさんに目もくれず、まっすぐはやぶさに向かっていく残雪の姿を見て愕然とする。逃げ遅れた一羽を助けるために残雪はかなうはずのない相手に戦いを挑もうとしているのだ。そういう状況がのみこめたとき、残雪というものの得体が知れなくなってしまった。残雪のすさまじいばかりの気迫に左倒されて自然と銃が下りてしまったのである。

・かけつけた。

この時はもう第三者ではない。残雪の身を案じてその場にかけつけたのである。

・ただの鳥に対しているような気がしなかった。

血に染まりながらも屈服することなく敵を正面からにらみつける残雪。それははやぶさの姿と対照的であった。そんな残雪を畏敬に近い思いで見つめる。もはや目の前にいるのは鳥ではない。人間の自分をもはるかに超えた偉大な存在としてじいさんには見えた。

・手をのばしても

無雑作に手を出したのではあるまい。大切なものを扱うように、ていねいに、ゆっくりと、いたわるように、である。

[三章の構造]

じっと見つめながら
・じいさんにとびついてきた
・口ぶえをふけばどこにいても
・かた先に止まるほどに慣れていた

今年はひとつ、これを使ってみるかな。
・小屋がけした所からたまのとどく距離の三倍も離れている地点をえ場
・夏の出水でがんのえが十分にあるらしい

うまくいくぞ

〈残雪〉
さっと大きなかげ
人間もはやぶさもなかった、ただ救わねばならぬなかーまの姿があるだけだった

〈大造じいさん〉
ぐっとじゅうをかたに当てて
残雪をねらった

再びじゅうをおろしてしまった

かけつけた
もつれ合って
ぬま地に落ちて
いった
・残りの力をふりしぼって
・正面からにみつけた
・もうじたばたさわがなかった

ただの鳥に対しているような気がしなかった

〈四章〉

・残雪は、大造じいさんのおりの中でひと冬をこした。

残雪は、あのにらみつけた時の態度を持ち続けて冬を越したであろう。同様に、じいさんも残雪に対して強く心うたれたあの感動を持ち続けながら精一杯の世話をしてやったに違いない。残雪を元通りの体にしてやることが今の自分の為すべきことという思いで。

・ある晴れた春の朝

じいさんはこういう日を待っていた。このすばらしいがんを送り出してやるのは晴れた日の朝が最もふさわしいように思えた。

・おりのふたをいっぱいに開けてやった

冬の間、狭いおりに開じ込めて、えさをやる時もほんの少しの隙間

しか開けられなかった。今ようやくこのたくましい残雪を自由の世界に解き放してやれる。思いっきりはばたかせてやりたいというじいさんの気持ちがここにある。

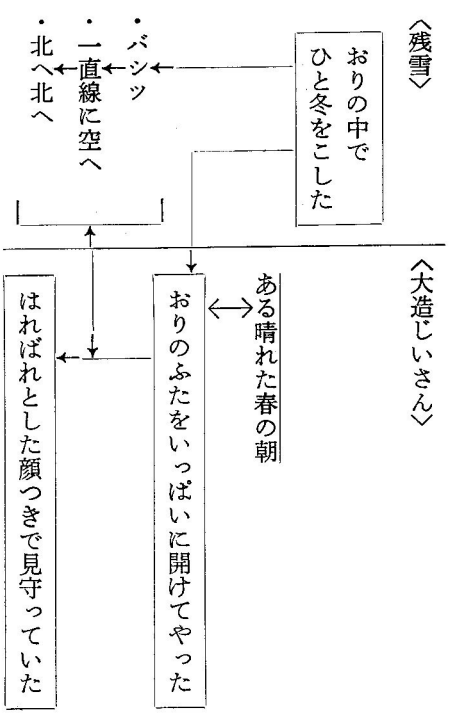
・**バシッ**

じいさんにとって胸のすくような力強い響き。いかにも残雪にふさわしい。

・**はればれとした顔つきで見守っていた**

もとは「ほれぼれ」になっていた。どちらも良いような気がする。「はればれ」には、残雪に対して自分がしてやれることを精一杯してやったというさわやかな気分がある。また、残雪という優れた鳥との出会いによって自分がひとまわり豊かな人間になれたことへの素直な喜びも感じられる。

［四章の構造］



3　学習指導の計画

「大造じいさんとがん」の学習計画を考えるにあたっては、次の二つのことを大事にしたい。

一つは、この作品のもつ豊かな価値内容を子どもたちに十全に味わわせてやりたいということ。もう一つは、子どもたちが自力で教材にぶつかり、自分で読み取りができる力を育てること。つまり文学作品の読解方法が身につくような学習にしたいということである。

この二つは別個のものではない。子どもたち一人ひとりが自分の読みをもって主体的に授業に参加していく力を持つことによって、この作品の世界もまた深く豊かに味わえるからである。

従って、学習計画は個人学習を土台として組み立てていくことにする。個人学習では、主として・大筋をとらえる・場面毎の大造じいさんの心情について自分なりの読みを持つ・自分としてわかること、まだわからないことを明らかにする、そういうことができるようにする。その上に立って、一斉学習では残された課題を各自の読み取りをもとにして追求していく。そんなふうに全体の指導計画を構成してみた。

指導計画（十三時間）

〈第一次〉全文を通読し、学習計画をたてる……（三時間）

(1)全文を通読し、初発の感想を書く。（個）

(2)あらじをつかみ、感想や疑問を出し合う中で追求の視点をつくる。（個→全）

〈第二次〈場面ごとに詳しく読む……（九時間）

(1)一章の個人学習（書きこみ・語句調べ）

(2)「たかが鳥」から「うーむ」へと残雪を見る目が変化していく大造じいさんの心情を追求する。
(3)二章の個人学習
(4)「うーん」とうなってしまう大造じいさんの心情を追求する。
(5)三章の個人学習
(6)「うまくいくぞ」とにっこりする大造じいさんの心情を追求する。
(7)「ただの鳥に対しているような気がしなかった。」という大造じいさんの心情を追求する。
(8)はればれとした顔つきで残雪を見守る大造じいさんの心情を追求する。

〈第三次〉学習のまとめと発展……（一時間）
(1)学習後の感想を書く。
(2)他の動物物語の作品紹介・漢字練習等。

指導計画全十三時間はやや多いかもしれない。だが、個人学習を中核として一人ひとりが主体的に読みこんでいくような学習にするためには、最低これだけの時間数は必要であろう。まして個人学習の経験のない学級なら、この時間数でも足りないかもしれない。計画中の個人学習をすべてやる必要はない。書きこみなども、ある場面だけに限定して取り組んでもよい。

全文視写なども大事な作業ではあるが、時間数の都合で割愛し、ここでは書きこみ用プリントを用意しておくことにする。

ある程度個人学習の力をつけている学級であれば、書きこみ等は家庭学習として、授業時間は子どもどうしの意見交流に重点をおいてもよいだろう。

要は、何を重点的に指導するかでこの指導計画も交わるということである。

4　教材の指導目標

◎残雪に闘いを挑むたびに残雪の姿が新たなものとなり、ついには人間の自分をもはるかに超えた崇高な存在として大造じいさんは残雪を見るようになる。こうした大造じいさんの心の変容を叙述に即して読み取る。

○登場人物の心情を行動や情景描写の文を軸にして前後の文脈と関係づけて読み取る力をつける。

5　指導の展開例

(1)第一次（音読・あらすじ取り）

この段階の学習は、個人学習を主体に行う。その場合、どの子もが自力で学習が進められるように、「手引き」を作ってやるとよい。その一例をあげてみる。

〈ひとり勉強の手びき〉

①まず、読めない漢字はとばしてよいから声を出して二回は読んでみましょう。
②読めない漢字に印をつけ、読み方の見当をつけながらゆっくり読みましょう。
③読めない漢字をノートに書き出し、教科書のおしまいの所か辞

書で調べたり、先生や家の人に聞いて読めるようにしましょう。

④もう音読はできるようになったと思います。会話文や間の取り方に気をつけてもう一度読みましょう。

⑤今度は、黙読しながら意味のわかりにくい言葉や文に印をつけましょう。

⑥意味のわからない言葉をノートに書き出し、辞書で調べたり先生や家の人に聞いてわかるようにしておきましょう。

⑦次に物語のあらすじをノート一～二ページに書きましょう。

・大造じいさんがしたことを〈はじめの年〉〈次の年〉〈その次の年〉〈最後に〉と年ごとにまとめて書くとわかりやすいあらすじになります。

・本をあまり見ないで頭に残っていることを自分の言葉で書くようにしましょう。

⑧あらすじを確かめながら、もう一度ゆっくり黙読してみましょう。もし大事なことでぬけていることがあったら書き加えましょう。

⑨ここまで読み進めればだいたいのことはわかってきたと思います。ここで感想を書きましょう。

・この物語で強く心に残ったところはどこですか。またそのわけも書きましょう。

・もっと詳しく考えてみたいと思うのはどんなところですか。

ここでは、どの子もが読め、あらましがわかり、自分なりの感想がもてる状態にまで高めることをねらっている。

この手引きの項目の中で特に重点を置きたいのはあらすじ取りである。あらすじ取りは、物語の骨格を明らかにするという意味で大変重要である。だが子どもたちの多くはあらすじ取りがむずかしいという。長い文章のどこをどう切り取って書けばよいのかがわからないである。だから、あらすじ取りについては、一度は一斉学習でその方法を学ばせることも必要であろう。

あらすじ取りの方法はいろいろ考えられるが私の経験では主人公の行動を展開に即して順序よく書き抜くというやり方が一番子どもたちにわかりやすいようだった。従ってここでも主人公大造じいさんがしたことを年毎に書いていくという形にしている。なお、本をなるだけ見ないように、というのは、本を見ているとどうしても細部にこだわり大筋が見えにくくなるからである。自分の頭に残っているものを自分なりの言葉で書いていく方が筋としてまとまったものになりやすいからである。また、ここでは大まかな筋がつかめればそれでよいのであって、必要以上に正確さを要求しない方がよい。

感想もあらすじをもとに書かせるようにしたい。本を見させるとつまらない枝葉末節にとびついてしまう恐れがあるからである。大筋の中で自分なりの感想をもち、またそこから追求すべき大きな課題も見えてくるようにさせたい。

(2)第一次のまとめ（感想を交流し合い、この物語の大きな追求課題を作る。）

手引きの学習を終えた子どもたちは、それぞれの能力に応じて感想を持っている。それを一斉学習の場で自由に出し合い、一応この物語

の世界をつかむこと、そして次の精読段階での追求課題を明確にしてやることがこの時間のねらいである。

子どもたちの感想として予想されるのは、次のようなものである。

〈残雪〉

・残雪はすごいなあ。仲間を助けようとしてはやぶさとたたかったから。
・かしこいやつだなあ。
・勇気があるりっぱなやつだ。

〈大造じいさん〉

・大造じいさんはねばり強い人だ。
・じいさんはくやしかっただろうな。
・ひきょうなまねをしなかったじいさんはやさしい。
・最後にがんの気持がわかったじいさんはよい人だ。
・はじめのじいさんと終わりのじいさんはちがっているようだ。

この物語の筋の明快さから見て、主題からそう大きくはずれたような感想は出ないだろう。子どもたちの感想をまとめながら、この段階での一応の主題把握をしてみたい。

そして次に、もっと詳しく考えてみたい部分について話し合う。子どもたちの多くが疑問として持つのは

・なぜじいさんは残雪をねらったのに撃つのをやめたのか。
・なぜ残雪を逃がしてやったのか。

という点である。あれほど必死に闘いを挑み続けたじいさんが、なぜ撃つのをやめ、最後は逃がしてやったのか。子どもたちの中からはいろんな意見が出るだろう。おそらく一つにはなるまい。その時、ここが大きな追求の山場になることを子どもたちは認識する。そこで、これを明らかにするためには、じいさんの残雪を見る目ははじめどうだったのか、どこでどう変わったのかということを詳しく見ていく必要があることをその話し合いの中で確認していきたい。そこまでいければこの時間のねらいは達成される。

(3) 第二次（場面ごとに詳しく読む）

ア　個人学習（書きこみについて）

第二次の学習は、個人学習（書きこみ）と一斉学習を交互に繰り返しながら進めるという形を取っている。その理由は次のようなことである。

・この長文をひとわたり個人学習してから一斉学習に入るという形は、子どもたちの能力差を考えた場合かなりの進度差が出てしまう。
・短い範囲で書きこみの方法をていねいに教え、どの子にもひとり読みできる力をつけてやる。そして、二章、三章と進める中で習熟させていく。その方が子どもも教師も取り組み易い。

むろん、これはまだ個人学習に習熟していない学級を想定してのことであるから、子どもたちの力に応じてもっと組織学習（グループ学習）に重点を置いてもよい。また、追求の山場となる部分だけに限定して個人学習から組織学習を進め、他は一斉学習でやってしまうという形も考えられよう。

ここでは、個人学習の経験がない子どもたちを想定してその学習活

動をどう進めるかということについて述べてみたい。

精読段階での個人学習は、「書きこみ」が中心になる。これも、経験のない子には、どんな言葉に着目し、どんなことを書きこんでいけばよいのかわからないのが普通である。だから、書きこみの仕方についての手引きを作ってやる必要がある。その一例をあげてみる。

〈書きこみのための手引き〉

大造じいさんの残雪に対する気持ちがどう変わっていったのかということを中心に書きこみしましょう。

①まず、大造じいさんのしたこと、言ったこと、気持ちを書いた文に線を引きましょう。

②その中で、特にじいさんの気持ちが強く感じられることばを□で囲みましょう。

③□のことばを中心に、そこでのじいさんの心の中を想像して書いてみましょう。

・そのことばの前後を読むと、なぜじいさんがそんな気持ちになったのかがわかる文やことばがあります。そういうことばを線で結んで考えましょう。

④情景を描いた文にもじいさんの気持ちが出ています。そういうところを見つけて書きこみしましょう。

⑤書きこみできたら、いろんな友だちのところへ行って考えをくらべてみましょう。

・ちがう読みがあったら話し合ってみましょう。

・友だちどうしで意見が分かれたり、はっきりわからないところは赤ペンで印をつけておきましょう。

書きこみの部分を①②のように限定したのは次のような意図からである。

一文〳〵ていねいに関わっていくのは大切だし、そのことによって作品の微妙な味わいにまで触れていけることは事実である。だが、書きこみの範囲を広げ、自由にやらせるとかえって雑多なものが出てしまい、主題追求があいまいになる恐れがある。個人学習に習熟していない学級では混乱を招いてしまう。だから初期の子どもたちには、はっきり追求の道筋が見えるような書きこみをさせた方がよい。じいさんの行動に焦点を当てたのは、それが子にもわかる部分であり、そこを読み取ることできちんと主題に迫れるからである。このような限定は、⑤の組織学習を進める場合にも大変都合がよい。みんな、共通の部分で書きこみしているからである。

また、読み取りは、文脈の中でその言葉の意味を考えるのが原則であるが、子どもたちの多くは、その言葉だけで考えようとする。だから勝手な想像になったり、わからなくなってしまったりすることが多い。文脈に即して読ませるために、読みの根拠となる文を線で結ぶという作業はぜひやらせたい。幾通りかの解釈が出た場合も、文に即して検討していくことができ、話し合いが明確なものになる。

〈○手引きの進め方について。〉

かなりていねいな手引きを作ってやっても子どもたちの何割かは困ってしまうというのが現状である。そこで、はじめはこの手引きのやり方について、一斉学習で実際にやってみるとよい。例えば次のように。

①教師がゆっくり範読してやりながら線を引かせてみる。そして引いたところを発表させたり、抜けているところを指摘してやる。

②特に気持ちが強く感じられるところ、という言い方はあいまいだが案外子どもは見つけていくものである。意識的に朗読の調子を変えて気づかせていってもよい。また、感情の凝縮している言葉は、副詞句、助詞、文末などにあることが多いこともわからせていく。「今年こそ」「むちゅうで」「思わず……もらしてしまった。」のように。

③□の言葉の読み取りについても子どもたちにいくつか発表させてみる。そして「そういうことを書けばいいんだよ。」と書き方を教えてやる。また、「どこからそう思ったの?」と根拠をただし、「その言葉を線で結んでおくとよくわかるね。」と線の結び方も教えてやる。「たくさんの言葉、遠くの言葉と線を結べる人ほどいい読み取りができるんだよ。」とそそのかしたりする。

まだ、一人ひとりの力が弱い段階では、①〜④の学習は近くの友だちどうしで話し合いながら進めてもよい。遅れている子などはその方が安心して伸び〳〵と学習に取り組めるようだ。

書きこみの学習中は、教師は一斉学習の時以上に一人ひとりに神経をはりめぐらして精力的に動くことが大事である。

書けなくて困っている子には、具体的に問いかけてやったりヒントを出す。「いまいましいってどんな意味かわかる?」「じゃ、ここでじいさんがいまいましいって思うのはどうしてだろう?」とか、「ただ喜んだんじゃないね。子どものようにだね。何がそんなにうれしかったんだろう。」などと。

こんなふうにしてどの子もが自分の読みをもてるようにしていく。

手引きの⑤は、友だちと意見を交流しながら自分の読み取りを煮つめていく組織学習にあたる。書きこみに慣れてきたら①〜④は家庭学習とし、授業時間では⑤の組織学習を中心に進めていくとよい。教師はあらかじめ個々の子どもの読みを把握しておき、よく似た考えの子、あるいは反対の考えの子をつないで話し合わせるような仕事をする。学級の力が高まってくると、この組織学習で各自の読みがいくつかのグループに整理され、それをもとにした一斉学習を展開することも可能になってくる。

だが初期の段階ではそこまでねらわなくてもよい。ごく素朴に、友だちどうしの意見文流ができればよい、というぐらいの心づもりで取り組んだ方が無理がないだろう。

(イ) 一斉学習の展開案

[指導案のための教材解釈]

「大造じいさんとがん」は、一人の老猟師大造じいさんと、抜きん出た智恵と統率力を持つがんの頭領残雪との闘いを描いた物語である。

大造じいさんは熟練の腕を持つ老猟師である。だが、残雪が来るよ

うになって以来、一羽のがんも取れなくなってしまう。たかが一羽の鳥に弄れ猟師の誇りを傷つけられていることがいまいましくてならないじいさんは、己れの持てる力の全てをかけて残雪に挑んでいく。だが残雪は、常にじいさんを上回る鋭い智恵と洞察力でじいさんの計略をかわしていく。三年目の闘いの時、これまで逃げることによって身を守ってきた残雪が、仲間を助けるために身を捨てて窮地に飛び込んでいく。そして、傷つき動けなくなっても最期まで頭領らしい堂々たる態度を取り続ける。その、鳥とも思えぬ生きざまの見事さに強く心打たれ、じいさんは己れの心の狭さ、人間としての小ささを変革していく。こうした、残雪によって変革されていく大造じいさんの姿がこの物語の主題である。

学習に取り組むにあたっては、読み取りの視点を大造じいさんに当て、その行動描写・心理描写の文を軸にして大造じいさんの心の変容を追求していきたい。

大造じいさんの残雪を見る目は、最初は「たかが鳥」であり獲物としてのがんにすぎなかった。しかし、成功を確信していた釣り針の計略が自分の予想もせぬ方法で見破られ、「うーむ」と感嘆の声をあげた時から自らを挑戦者として位置づける。二年目、又しても破れ、残雪の存在は一層大きなものとなる。だがそれはあくまで残雪の智恵に対する驚嘆であった。三年目の決戦で、じいさんはこれまでの残雪と違う、全く新しい残雪の姿を目の当たりにして心の底から感動する。それは、もはや鳥と人間という次元を超えて、同じ生きる者としての次元での驚嘆であった。「ただの鳥とは思えなかった。」には、そんな思いがこめられている。大造じいさんの心の変容を追求していく最終最大の核として、この「ただの鳥とは思えなかった。」を捕えたい。

なお、この物語の学習では、子どもたち自らが読み深めていく力も育てていきたいという願いから、個人学習を中核とした指導過程を組むことにした。

(4)第三次（学習のまとめと発展）

ア　学習後の感想

感想は、できれば一時間毎に一～二行でよいから書かせておくようにしたい。そして、最後にそれらをまとめる形で学習後の感想を書かせる。感想は、次のような視点で書かせるとよい

①学習の最初の頃の読みと比べて変わったところ、もっと詳しくわかったところはどこか。
②作者がこの物語で読者に伝えたかったのはどんなことだろうか。

また、個人学習についての感想も書かせてみる

・自分の力でできるようになったのはどんなことか。
・まだやり方がよくわからなくてむずかしかったのはどんなことか。

こういうことを書かせておくと、次に手引きを作るときの参考になる。また、重点的に指導すべきところも見えてくる。

子ども達の中には感想が一～二行しか書けない子もいる。そういう子に対しては、その子の書いた文の中からもう少し詳しく書かせたい

ところを見つけ、子どもと話し合いながら書く内容を具体的にしてやるとよいだろう。

イ　発展（他の動物物語の紹介）

この学習の発展として椋鳩十の他の作品を紹介し、読書の世界を広げてやりたいものである。「片耳の大鹿」「クロ物語」「金色の足あと」「マヤの一生」などが高学年向きだろう。「椋鳩十コーナー」を教室に設けて、椋鳩十全集を並べてやったりするのもおもしろいだろう。

わたしの授業計画

核となる言葉	
主な発問	
子どもの反応予想	
結晶点	
教師として考えておくこと	

〈第二次・一斉学習の展開案〉

①（一章前半）

・**本時の目標**

たかが一羽のがんに経験豊かな猟師としての誇りを傷つけられている悔しさが、精魂こめた計略の成功で一挙に晴れる思いになる大造ぎいさんの心情を読み取る。

・**本時の展開計画**（第二次・九時間配当・二時間目）

核となる言葉	主な発問	子どもの反応予想	結晶点	教師として考えておくこと
・決して…人間を寄せつけなかった ・残雪が来るようになってから ・一羽のがんも いまいましく思っていた	◎なぜじいさんは、残雪のことをいまいましく思うのだろう ・一羽のがんもとれないことが、なぜそんなにくやしいのか	・残雪が来るようになってから一羽のがんもとれなくなったから ・一羽もとれないと暮らしていけないから ・鳥の智恵に、ベテランの猟師が負けているから ・前はたくさんとっていたのに、と思うと残雪がにくくてたまらない ・今年だけでなく、もう何年も残雪にやられ続けている	人間の、しかも熟練の猟師である自分が、はるかに下等な鳥如きに弄ばれているということがいまいましさの核になっている。	残雪が来る前を想像させ、来てからの状況と比較させることで、ここのじいさんの悔しさを具体的に実感させていく 残雪 ○○ たくさん × × × 一羽も ← 今年 （板書例） ・じいさんの悔しさの中味として、生計上の問題をいう子もある、否定するのではなく、一応認めた上でじいさんの悔しさの中味として最も強いものは何か、ということで子どもに考えさせていく

今年こそは

・かねて考えておいた特別な方法
・ひとばんじゅうかかって

・一羽だけであったが生きているがん

「ほほう、これはすばらしい」
思わず子どものように声をあげて

◎「今年こそは」ということばから、じいさんのどんな気持ちが感じられますか

・それは、じいさんのどんな姿に出ていますか

◎たった一羽のがんなのに「これはすばらしい」と子どものように喜ぶのは、なぜでしょう

・今年こそは絶対に残雪をやっつけるぞ。
・今までのうらみをきっとはらす。
・残雪を待ち構えている。

・「かねて」だから、残雪が来るずっと前から作戦を考えていた。
・ひとばん中かかってしかけた。なんとしても成功させたいから一生けんめいになっている。
・寒くて冷たい水の中でも、がんばってる。
・今までのくやしさがあるから必死。

・何年ぶりかで、やっとえものがとれたから。
・自分の考えた計略が見事に成功したから。
・残雪の智恵に勝ったから。
・これまでの苦労が報われたから。

今年も残雪が来ることを予想して、さまざまな策略をめぐらし、今までのがん猟にない全く新しい方法を考えついた。
しかも、実際に準備していると、ますますこの方法が確実なものと思えてくる。
今年こそは、という意気込みに一層はずみがついて、夢中で朝までしかけを作り続けたのだった。

とれたがんの数など問題ではない。
いまいましい残雪を初めてうちまかしたこと。
つまり、自分の智恵が、残雪の智恵に勝ったことがうれしくてならない。

・「かねて」を具体的にする。
・いつごろから考えていたのか
・この方法だけ考えていたのか
これらの問いかけによって、じいさんの執念に目を向けさせていく。

・「ひとばんじゅう」
ここのじいさんの姿を豊かに想像させたい。
・冬・暗闇・冷たい水の中
・じいさんの顔つき
ニタリ、ニタリ……

・「これ」のさす内容を考えさせる
これ
・一羽のがん
・計略
「これ」の中味としてじいさんの考え・準備した計略そのものがあることに気づかせる。

②（一章後半）

・本時の目標

たかが鳥と見くびった残雪が、じいさんの予想もしなかった方法で仕掛けを見破ってしまう。その智恵の鋭どさに改めて驚く大造じいさんの心情を読み取る。

・本時の展開計画（第二次・九時間配当・三時間目）

核となる言葉	主な発問	子どもの反応予想	結晶点	教師として考えておくこと
たかが鳥 ・秋の日が美しかった ・がんの大群が飛びたった はてな	◎よく日出かけていくときのじいさんの気持ちは、きのうと同じだろうか ・どのことばからそれが感じられる？	・きのうより落ちついている。 ・きのうよりもっとはずんでいる。 ・自信たっぷり。 ・「たかが鳥」もう残雪もこわくない。たいしたことないと思っている。 ・「もっとたくさんのつりばり」この計略にすっかり自信をもっている。 ・「秋の日が美しかった」景色を見る余裕がある。おちついているから。	・残雪も、たかが鳥にすぎないと思ったじいさんは、この計略にすっかり自信を持ち、「今日はもっとたくさんかかっているぞ。」という気持ちで出かけていく。 きのうは夢中で景色など見る余裕もなかったのだが、今日はそれが目に入ってくる。 すっかり落ち着いていて、不安など全くない。	・出かける時点では、全く心配なんかしていなかった。ということを確実におさえること。そうでないと、「はてな」が読めない。 ・「はてな」は、子どもにはなかなか読めないだろう。

いったいどうしたことだろう

つりばりの糸がみな、ぴいんと引きのばされてある

「ううむ！」思わず感たんの声

◎じいさんは、何が不思議だったのか。

・今ごろがんの大群が飛び立つなんておかしい。
・つりばりにかからずに今まで餌をあさることなんかできないのに。
・わけがわからない。

◎この時のじいさんの心の中はどうだったのか。
・くやしさはなかったのか。

・びっくりした。
・思わず感心してしまった。

・残雪のかしこさにびっくりして、この時はくやしい気持ちがどこかへいってしまってる。
・自分でもこんな見破り方があるなんて思ってなかったから、心からすごいと思っている。

◎じいさんの残雪を見る目は、はじめと比べてどう変わっただろう。

・やっぱりただの鳥ではない。
・思っていたよりずっとすごいやつなんだ。
・今までよりよけいに残雪をやっつけたくなる。

・ここでは、逃げられた、というくやしさではなく、予想していたのと全く違う状況に突然出くわして面くらっているイメージをつくる。

「ううむ」には二つの内容がある。
一つはこの計略の見破り方に対する驚き。
こんな方法があるとは、計略を考えたじいさんにもわかっていなかった。
更に、そういう智恵を持っている残雪そのものへの驚き。
なかなかりこう、どころではない、大変なやつなんだなあ、という思い。
・もはや一段低い者という目で見てはいない正当なライバルとして見るようになる。

沼地に着くまでじいさんの頭にあったのは、昨日と同じ状況であったことをはっきりさせてやること。
・沼地に向かうときじいさんは、どんな状況を頭に思い浮かべていたんだろう。

・感嘆の声をあげた瞬間のじいさんの感情を理くつでなく、実感としてとらえさせたい。

「はてな」「いったい」と全く謎であったことがやっと解けた。
なんと、こんな方法があったのか……。

③（二章）

・本時の目標

昨年以上に周到な準備をし、絶対の自信をもって決戦に臨んだにもかかわらず、またも残雪に見破られ、無念さでいっぱいになるとともに、残雪が一層巨大な存在として見えてくるじいさんの心情を読み取る。

・本時の展開計画（第二次・九時間配当・五時間目）

核となる言葉	主な発問	子どもの反応予想	結晶点	教師として考えておくこと
夏のうちから たにしを五俵ばかり ・がんの好みそうな場所にばらまいておく ・案の定 ・一番気に入りの場所となったらしい 念のえみをもらす	◎ここからじいさんのどんな気持ちが感じられますか。 ・それは、どの言葉によく表われていますか。 ◎「会心のえみをもらす」とはどういう意味ですか。 ・なぜそんな気持ちになったのだろう。	・今年こそは、失敗しないぞ。 ・なんとしても残雪に勝ちたい。 ○「夏のうちから」 ・まだがんが来る季節でないときから準備している。 ○五俵 ・たにしを五俵も集めるのはたいへんなことだ。 ・冬まで保存しておくのもいろいろ手間がいる。そこまでじいさんはやっている。 ・自分のしたことを心から気に入って満足すること。 ○一番気に入りの場所 ・残雪はじいさんの計略を全く疑っていない。	昨年の敗北が一層闘志をかきたてる。 もはや、じいさんは、自分の生活すべてを打倒残雪にかけている。 その意地と執念が、途方もない作業をも可能にしていく。 ・残雪たちを完全に欺くことができたこと。 ・夏のうちからの苦労が報われたこと。 ・すべてが自分の計算通りに運んだことへの満足。	○たにし五俵を集め、保存しておく苦労を具体的に想像させる。 ・一日、どれぐらい集められるだろう。何日かかっただろう。 ・どうやって冬まで生かしておいたのだろう。 ○「会心」の意味をきちんとおさえること。 そうでないと、単に詐略がうまくいった、という表面的な読みに終わる恐れがあ

・がんの群れを待った
←
・点々と
←
・ぐんぐん
←
・ほおがびりびりするほどひきしまった
←
「ううん」とうなってしまった。

◎「ううん」には、じいさんのどんな気持ちがこもっていますか

◎一章の時と比べて、残雪に対するじいさんの気持ちはどう変わっているだろう。

今度こそ絶対成功する。

。夏のうちから

・苦労して準備したかいがあった。

・すべて自分の予想通りだったので、自分で自分をほめたいような気分。

・声も出ないほどくやしい。

・あともう少しだったのに…

残雪がにくくてたまらない。

・今までの苦労が水のあわ。

・絶対の自信をもっていたこの計略を、あっというまに見破った

残雪が、ますますすごいやつに思えてきた。

・いったい残雪は、どれだけの智恵を持っているのだろう。

・もっとすごいやつに思えてきた。

・残雪の計り知れない智恵が恐ろしくなった。

これらの感情が重なって会心の笑みとなる。

・夏のうちから準備してきた苦労が、最後の一瞬で水の泡となってしまった無念さ。

・完璧と見えたこの作戦の一点の隙を見抜いてしまった残雪の恐るべき智恵への驚嘆。

その二つが同時にこみあげてきた。

る。

・この時、じいさんは残雪をどう見ていたのか、ということも明らかにしておきたい。

それが会心の笑みの読み取りにもつながっていく。

・がんの群れを待ちうける場面は、朗読によって済ませる。それで十分この場面のイメージはつくれるはずだ。

○「会心の笑み」の時の残雪を見る目と、「ううん」の時の残雪を見る目を比べてみることで、ここでの驚きの中味をさぐっていく。

④（三章前半）

・**本時の目標**

残雪の計り知れない智恵を十分心におき、おとりのがん、現地の状況を冷静に点検した結果、今回の計略の成功を確信するに至るじいさんの心情を読み取る。

・**本時の展開計画**（第二次・九時間配当・七時間目）

核となる言葉	主な発問	子どもの反応予想	結晶点	教師として考えておくこと
じっと見つめながら ・じいさんにとびついてきた。 ・口ぶえをふけばどこにいても。 ・かた先にとまるほどに慣れていた。 今年はひとつこれを使ってみるかな	◎今回は、なぜ「これを使うぞ」ときっぱり言わないのだろう。 ・何が不安なのだろうおとりのがんに対する不安はあったのだろうか。	・残雪のかしこさが十分わかっているから慎重になっている。 ・この計略に自信がない。 ・二回とも負けて弱気になっている。 ・残雪のことだから、また見破ってしまうかもしれない。 ・ひょっとしたらおとりのがんが命令通り動かないかもしれない。 ・ない。 ・少しでも不安があったら「使ってみるかな」とはいわない。 ・「じっと」よく調べてい	おとりのがんは、まちがいなくじいさんの合図通り動くだろう。だが、あの恐るべき智恵を持った残雪のことだ、思いもかけぬ方法で見破ってしまうのではないか。そんな不安がどうしても、つきまとう。だから、決断しかねている。	・ここでのじいさんのためらいは残雪の計り知れない智恵に対する不安であることをはっきりおさえる。子どもたちの中には、おとりのがんに対する不安もあると考える子もいるだろうが、文章に戻ってきちんとわからせる。 ・どこにいてもを具体的にする。 ・えさを夢中で食べていても。 ・じいさんの姿が見えない所でも。 など。

・小屋がけしたところからたまのとどくきょりの三倍もはなれている地点をえ場。
・夏の出水で、がんのえが十分にあるらしい。

うまくいくぞ

◎この時のじいさんは、もう不安もなく、すっかり自信をもってきている。それはなぜだろうか。
・がんは、どんな所にいたのか。
・それは、この計略にとってどうなのか。

るのだから、おとりのがんのことは信用している。

・たまのとどくきょりの三倍もはなれているから。
・そこはがんのえが十分にあるから。

・三倍も離れているからじいさんが隠れていることもわからない。
・残雪は警戒しない。
・でも口ぶえは、よく届く、もっと遠いとおとりのがんに聞こえないかもしれない。
・がんのえが十分あるから当分、そこへ来続けるだろう。

現地の状況は、この計略にとって理想的なものだった。
遠すぎもせず、近すぎもせず、しかもがんのえは十分にある。
おとりのがん、現地の状況、どれをとっても残雪のつけ入る隙は何ひとつなかった。

・「三倍もはなれている」ことの意味は、子どもたちには、ちょっとむずかしいだろう。
・五倍も離れていたらどうか。
・小屋のすぐ近くだったらどうか。
などとヒントを出して考えさせる。

⑤（三章後半）

・本時の目標

絶対絶命の状況の中へ敢て仲間を救うために飛び込んでいく残雪の姿。しかも最期まで頭領らしい態度を取り続けようとする残雪の姿を畏敬に近い思いで見つめるじいさんの心情を読み取る。

・本時の展開計画（第二次・九時間配当・八時間目）

核となる言葉	主な発問	子どもの反応予想	結晶点	教師として考えておくこと
・残雪をねらった ・残雪の目には人間もはやぶさもなかった。 ・ただ救わねばならぬ仲間の姿があるだけだった。 なんと思ったか 再びじゅうをおろしてしまった ・もつれ合って ぬま地に落ちていった。 かけつけた	◎じいさんはなぜじゅうをおろしてしまったのでしょう ・おろした おろしてしまった どうちがう？	・ここで撃つのはひきょうだと思ったから。 ・おとりのがんを助けてほしいから。 ・かなうはずのないはやぶさに向かっていく残雪を見ていると、とても撃つ気になれなかった。 ・残雪の勇気に心をうたれて自然と銃が下りてしまった。	おとりのがんを助けてほしいという打算や、ここで打つのはひきょうだ、というような理性が働いたのではない。 残雪の無媒とも思える行為のその気迫が、強くじいさんの心をうち、撃つ気力をなくさせてしまったのだ。	・子どもたちから出されるいろんな意見を吟味していくこと。
	◎じいさんは、どんな思いで走っただろうか。	・どうなったのだろうか。 ・残雪はだいじょうぶか。 ・一刻も早く残雪を助けてや	この時には、もう、残雪をとらえたいとか傍視者的にどうなったか	

・残りの力をふりしぼって。
・正面からにらみつけた。
・もうじたばたさわがなかった。

ただの鳥に対しているような気がしなかった

◎「ただの鳥に対しているような気がしなかった」とは、どういうことだろう。

・今までは、ただの鳥だと思っていたのか。

・じいさんはどんなふうに手をのばしただろう。

りたい。

・ふつうの鳥ならこんなことはとてもしない。
・すごいやつだなあつて感動している。
・鳥と思えないぐらいすごいものに見える。

・今までも、ふつうの鳥以上だと思っていた。
・今は、それよりもっとすごいと思っている。
・人間でもこんなことできない。人間以上のやつだ。
・智恵だけでなく心もすごい。

・そっと。
・ていねいに。
・大事なものを扱うように。
・いたわるように。

知りたい、といった思いはないことをはっきりさせる。ただ残雪の身を案じて走ったのだ。

・今までもただ鳥とは思っていなかった。だが智恵の鋭どさにおいてのことだった。

ここでは、もはやそんな次元を超えて、生きざまの見事さにおいてただの鳥ではない。

残雪の生きざまは人間以上のものだ。

・今までの、「ただの鳥ではない」とここでの、「ただの鳥ではない」との違いを追求させる。

・じいさんの具体的な動きをイメージ化することでじいさんの感動している心を読み取らせる。

⑥（四章）

・**本時の目標**

傷も治り、すっかり元通りの体になって力強く北へ飛び立っていく残雪を、心から喜んで見送っているじいさんの心情を読み取る。

・**本時の展開計画**（第二次・九時間配当・九時間目）

核となる言葉	主な発問	子どもの反応予想	結晶点	教師として考えておくこと
おりの中で ひと冬をこした ↓ **ある晴れた春の朝** ↓ **おりのふたを いっぱいにあけてやった**	◎じいさんは、どんな気持ちで世話していただろう。 ・残雪を自分の所で飼っておこうという気持ちはあっただろうか。 ○「いっぱいに」という言葉からじいさんのどんな姿や気持ちが感じられますか。	・早く元通りの体にしてやりたい。 ・大事に世話した。 ・残雪に悪いことしたなあ という気持ちがあるから 一生けんめい。 ・ない。 ・残雪は自然の中にいるのがよい。 ・早く元の頭領に戻らせたい。 ・思いっきり開けている。 ・さっと勢いよく開けている。 ・やっと自由にしてやれる。 ・さあ飛んでいけ。	残雪は、決してじいさんになつきはしなかっただろう。 だが、そのことがますますじいさんには、好ましいものに見える。 早く、大空に飛び立たせてやりたい、という気持ちで精一杯の世話を続ける。 ・とうとうこの日が来た、という喜び。 ・元気でとんでいけよ、というはげまし。 ・またもとの頭領に戻ってくれ、という願い。	・おとりのがんの世話をしていた時のじいさんと比べて考えさせる。 「ある晴れた春の朝」も扱ってみたい。 ・美しい春の朝のイメージ。 ・こういう日を待って放してやりたかった。

バシッ
一直線に空へ
北へ北へ
はればれとした顔つきで見守っていた

◎飛び去っていく残雪の姿をじいさんはどんな思いで見守っていたでしょう。

・「はればれ」とはどういう意味？

・なぜはればれとした気持ちになるのだろう。

・この時の来るのが待ちどおしかった。
・うれしくてはずんでいる。

・全く元通りの残雪だ。
・よかった。
・気持ちがいい。
・元気で飛んでいけよ。

・心がすっきりする。
・心が明るい。

・たくましい残雪の姿を見ていると気持ちがいいから。
・残雪が大好きになったから。
・精一杯世話をして元通りの体にしてやれたから。

それらが「いっぱいに」という言葉にこめられている。

・残雪を放つことによってじいさんの心も開かれていく。

「らんまんとさいた……」などの情景描写は、かえって力強い残雪のイメージをこわす。
だから、触れないでおく。

子どもの自学力を育てる国語の授業 No2

昭和六十二年十一月十五日　初版発行
検印廃止　六冊セット　定価二四〇〇円

著者　上野　芳樹　No⑩
発行者　大江　卓二
発行所　茎書房
東京都板橋区高島平七丁目十八―十
電話　〇三―九三八―七三三三
振替口座　東京一―一五九〇九七
発売元　㈱星雲社
東京都文京区小石川五丁目十九番二十五号
電話　〇三―九四七―一〇二一
印刷所　シナノ印刷㈱

※ 落丁本・乱丁本がございましたら、当社で送料負担のうえお取替えいたします。